

二十四、若杉山と神功皇后伝説

標高六八一坪の若杉山は霊峰として古くから崇められていました。そこには、若杉山の名の由来となる神功皇后の名が残る土地や伝説が伝えられています。

古事記によると、神の命に背き熊襲平定に失敗した仲哀天皇は、檀日の宮(香椎宮)で崩御されます。そこで仲哀天皇に代わり、神功皇后は、神に対する罪を解決し過ちを改めるために齋宮を小山田邑(久山町か古賀市か?)に造ります。自らが祭主となった神功皇后は、ある夜、武内宿禰に命じ琴を弾かせ、中臣烏賊津使主を霊媒者とし、その神意を悟ります。

神功皇后は神託に従い西征する前に、景行天皇の時代に九州鎮護の主神として皇国の始祖諸冊尊を奉る太祖神社へ戦勝祈願に行きました。その時御神木である杉の枝を手折り、お守りとして鍔の袖につけ、戦いに臨んだと言われています。

祖神社上宮から一町寅の方角にある八大龍王窟周辺には、神功皇后が自ら植えたと言われる矢籠の竹林があるとされます。

その後、神功皇后は筑紫の蚊田(宇美八幡宮)で応神天皇を産んだと言われています。



太祖神社上宮

血塗らずして勝利を収め、無事に帰還した皇后は、仲哀天皇が眠る檀日の宮に立ち寄り、その際生色を失わなかった杉枝を鍔と共に境内に埋めました。すると、この杉枝が茂り、綾杉と呼ばれました。

その後、神功皇后が太祖神社へお礼参りする際、この綾杉を分けて山に植えたことから「分杉山」と呼ばれ、それが時代の流れで「若杉山」と変わっていったとされます。

神功皇后は後にこの社を改築し、伊弉諾尊(太祖)を中座に、右に八幡大神、聖母大明神、宝満明神、左に天照大神、志賀大明神、住吉大神の合計七神を奉ったとされます。

この物語について『篠栗町誌(民俗編)』は、神功皇后が太祖神社にお参りされる際、臨月であるお腹をかかえ山を登っている途中、急坂にさしかかると大岩に手を付き、横になり一息つかれたとあります。そこでこの岩のことを「押さえ石」↓「押さ石(おさいし)」と言い、横になったところは「横岩(よこいば)」と言われ、今でも地名として残っています。また、太

参考資料

- 『西日本古代紀行 神功皇后風土記』
河村哲夫(西日本新聞社)
- 『新訂 古事記』 武田祐吉(訳注)(角川書店)
- 『筑前若杉郷土誌』 合屋武城
- 『篠栗町誌』 篠栗町